

水口拓壽著『儒學からみた風水―宋から清に至る言説史』

宮 崎 順 子

本書は、筆者が二〇〇九年に東京大學に提出した博士論文「風水思想と儒教知識人―言説史の観点から」に基づきつつ、全面的な改訂を加えた著作であり、儒教知識人の風水思想への言及に着目し、儒教思想史と儒教知識人論に新たな局面をもたらそうとした力作である。二〇一六年一月に風響社から出版された。

「緒言」で述べられているように、著者は長年に涉つて儒教知識人と風水思想との交渉史、特に宋代から清代至る時代を研究対象としてきた。その時代、一部の儒教知識人は風水思想の「矯正」を圖つて自ら風水理論書を

執筆したり、既存の風水理論書に注釋を加えたりすることがあった。これらの「儒教知識人 兼 風水理論家」たちの具體的な言論に注目して検討を加え、こういった手法を通して儒教知識人の「知」の構造を解明しようとする、その中間地點として本書はまとめられた。研究方法の切り口は非常に鮮やかであり、優れた成果が本書に實つたといえる。

本書の關心は、風水思想の土地選擇の技術そのものにあるのではなく、儒教知識人が風水思想という文化現象を、どのように受け入れ、否定し、影響を與え、また與

えられてきたか、引いては風水思想の存在が、儒教知識人の知の世界の中でどのような位置を占めてきたのかということにあると考えられる。

風水思想に關する資料が豊富に擧げられているのも本書の特徴で、「序論」で風水思想に關する先人の研究を著者の解説を交えて詳しく紹介しているばかりでなく、卷末の参考文献には書誌を記載の上で風水書が列記されているし、また「風水思想に關連する儒教知識人による著作」についても網羅的に記載され、最後に風水思想史の先行研究の一覽も附されている。

これらの資料は風水思想に關心を抱く萬人にとって非常に有益であり、中國の古典研究を志す者だけでなく、文化人類學研究者、また中國の風水思想の概觀を知りたいという方々にとつても、本書はまず手に取るべき基本的書籍であるといえる。

風水思想の研究はまだ歴史が淺く、個々の風水書の成立年代が確定しがたいため資料の研究にも困難が伴う。そんな條件のもと、著者の研究も多大なる困難とともに

あつたことは想像に難くない。また著者が扱った資料も、朱子を始めた儒教知識人の言説のみならず、『葬書』や『發微論』等の風水書、族譜、『四庫全書總目提要』など多岐に渉る。險しい道を辿るようにしてついにこのような一書にまとめられたことは近年の日本における風水研究の最大の成果であるといつてよい。

以下、第一章から順に目次を示し内容を紹介していきたい。

第一章 序論

本書の全體に關して問題の所在と研究の方法を示す部分である。ここでは狹義の風水の歴史を「第一の風水思想史」、儒教知識人の風水に對する言説の變遷を「第二の風水思想史」と名附け、後者を取り上げる意味について説明する。それは①宋代以後の風水の壓倒的な存在感のもと、道學の「正しい宇宙觀」「正しい禮教」を考える上で風水の宇宙觀や理念や技法に關心を向けざるをえなかった。②術數が道學の影響のもと南宋中期に展開したことを承けて、風水思想に關する儒者の言説が畫期的

に變化した。そのことから儒者自身の思想の變化も読み取れる。③道教・佛教・儒教・民間信仰や術数が織りなす全中國的なパンテオンの中に風水を位置づける必要がある。

④封建時代が終つた後も、知識人たちが風水思想を應用して一族の團結を圖るような言説が生産されたため、近現代を理解するためにも有効であるなどの理由による。續いて風水思想に關する先行研究を詳しく紹介している。明晰で詳細な解説が施されており、これまでの研究が問題にしてきたテーマ、現在の地點での研究成果が非常に分かりやすく呈示されている。

第二章 風水思想の概要

風水思想の概要を、術數という概念や「風水」という名稱の意味、風水思想における「吉地」の條件（龍と穴と砂と水）を含めて解説する。

第三章 『四庫全書』に示された術數學の地位―その構成原理と存在價值について

第三章では『四庫全書』が、儒教知識人と風水思想の關係に一つの完成形をもたらしたとみなし、『四庫全書』

の編集者が風水を含めた術數というものに對して示した理解と評價を明らかにする。

第四章 儒教知識人による風水思想の「發見」過程―朱熹以前から朱熹以後へ

第四章から第八章までは、風水思想をめぐる知識人の言説が第三章に示すような完成形にいたるまでの道程を年代に沿って検討して行く、本書の中心をなす部分であり、北宋代から南宋代にかけて、儒教知識人が「正しい宇宙觀」と「正しい禮教」を探求する中で、風水が「正しい儒教文化」の一翼となり得るという認識が起つたということを宋代道學との關連で論述する。

第五章 王權に獻げられた風水言説―朱熹の風水理解をめぐる

朱熹に焦點をあてる。儒教知識人による風水思想への肯定の初期段階という位置づけにおいて、朱熹が示した「宋朝による中國再統合の正當性が風水思想によつて裏付けられる」という論理と、「宋朝の強化のために風水思想を用いる」という構想を分析する。

第六章 「儒理」に基づく風水理論の再編——傳蔡氏撰

『發微論』をめぐる

南宋の著名な儒者である蔡元定、或いはその父の蔡發の著作として傳わる風水理論書『發微論』を取り上げる。後世の『四庫全書總目提要』が、同書を「風水思想を儒理に據つて探究した」と見なして、總體的に高い評價を與えたことに注目し、その直接的理由としての「儒理」の含意を、易學理論と天人相關論の兩面、また「正しい宇宙觀」「正しい禮教」の兩面から分析する。

第七章 氣の理論に施された改造——『劉江東家藏善本葬書』鄭謚注をめぐる

明代初期の道學者鄭謚が、『葬書』の一エディションである『劉江東家藏善本葬書』に附けた注釋を、風水思想を「正しい宇宙觀」「正しい禮教」に取り込もうとした營みとして取り上げる。第一に『葬書』に語られる氣の理論に鄭謚がもたらした「道學化」と呼ぶべき變化を分析する。第二に鄭謚は「心を持った墓中の祖先」というアクターを、陰宅風水のメカニズムに關する語りに組

み入れたのだが、そのようにして擴張された風水的世界システムを、道學の死者觀・靈魂觀・祖先祭祀論との影響において検討する。

第八章 選地技術を牽制する天——風水を道德と結びつける言説の諸相

天の役割や積徳の必要性を説くような明代中期―清代中期の風水理論書、及び既存風水理論書に附けられた注釋を、『發微論』の影響下に成立したと考えられるものを中心として複數取り上げ、それらの文獻に現れた言説を、『發微論』との異同に注意しながら分類する。

第九章 機械としての墓と、人格を持った祖先——福建上杭『李氏族譜』に見る風水言説

中國福建省西部の上杭縣に宗祠を構える李氏宗族が、一九九〇年に編纂した『李氏族譜』と、その始祖とされる人物の事績を記す『李火徳史話』を取り上げる。この章は、儒教知識人が中國史の表舞臺から退場して以後も、宗族を代表するような知識人たちにより、風水思想への關心が繼承されてきたと共に、風水思想を應用して一族

の團結を圖るような言説が生産され續けたことを示す。

第十章 結論

術數概念の第一期（北宋中期以前）には、司馬光をはじめとする儒教知識人は、「正しい禮教」「正しい宇宙觀」の雙方の觀點から風水思想を非難した。

しかし第二期（北宋中期以降）、蔡元定や鄭謚を主とする道學者は、彼らの定立した「正しい宇宙觀」に基づいて森羅萬象を演繹的に説明することに努めるようになり、「正しい宇宙觀」に風水思想の宇宙觀を選択的に取り込むとしただけでなく、次の段階として、風水の宇宙觀を道學の宇宙論に基づいて再構築しようとした（蔡元定『發微論』など）。それは自ら風水書を執筆することによって、風水術の陥りがちな暴走を内部から積極的に矯正しようとする試みであった。道學から「天」というアクターを取り出し、「積善の人に天の應報として吉地が與えられる」という言説を風水的世界システムに導入したのであった。

第三期は清代中期における『四庫全書』とその文獻解

題集『四庫全書總目提要』の成立によって幕が開けられた。四庫館臣たちは、風水を含めた術數學に警戒しつつも學藝體系の中に一席を與え、術數一般に對する儒教知識人の認識や評價は完成形に迫り着いた。

清朝が減んだ後も、親族集團を代表するような知識人たちが族譜を通して、風水思想に對する關心を發信し續けた。

以上が本書の概要である。儒學と風水との交錯した關係を一筋ずつ解きほぐすようにして、全體の大きな流れを説明しており、隨所に優れた分析が見られる。例えば蔡元定や鄭謚が風水書を著作したり注釋を書いたりしたのは、「自ら執筆することによって、風水術の陥りがちな暴走を内部から積極的に矯正しようとする試み」であったという指摘には目を開かれた。これまで朱熹など儒者側から風水への一定の評価があったことは指摘されてきたが、もう一步論を進めて儒者側が風水自體を取り込もうとしていたことを指摘したことは大きな成果である。儒者が道敎の著作に注を附けることも行われてきた

譯で、そういったことから考えても、風水思想の儒學に與えた影響に關して今後さらに研究を進める餘地があると感じた。著者の今後に期待したい。最後に一つだけ本書の弱點を指摘するならば、風水研究一般の弱點でもあるのだが、書籍の成立年代や著者が時に明確でない點、資料が少ないため年代が飛び飛びであるという點があげられる。『發微論』の著者に關してもさらなる調査を續けていただきたいと思う。

(A5判、四〇六頁、二〇一六年一月二十五日、

風響社、五〇〇〇圓(税別))

日本道教學會第七十三回大會豫告

一、日時 二〇二三年(令和四年)十一月十二日(土)

一、會場 山梨縣立大學飯田キャンパス

一、行事 研究發表會・總會

合同役員會は大會前日の十一日(金)に行う豫定です。

連絡先 〒400-0035 山梨縣甲府市飯田5-11-1

山梨縣立大學國際政策學部 名和敏光研究室

TEL 〇五五-一二四-五二七六

e-mail nawa@yamanashi-ken.ac.jp